

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」2015年度第3回公開セミナー報告

タイトル:アフリカの問題はアフリカ人自身で～ナイロビのスラムで建築家たちがはじめた実践

日時:2015年11月2日(月)17時45分～19時45分

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所マルチメディア会議室(304)

司会:椎野若菜(AA研)

講師:ディック・オランゴ(Ateliers Olango Architecture and Design)

参加者:23名

内容:

今回のセミナーでは、ケニア人建築家のディック・オランゴ氏を講師に招き、ケニアの首都ナイロビで行なっている実践的な活動について講演をしてもらった。オランゴ氏は文部科学省の奨学金を取得して来日した後、日本の高等専門学校と大学で建築学を学んだ。その後、日本国内に建築設計事務所を設立して日本人建築士とともに仕事をするかわり、国際的な建築設計コンペティションにも応募をしてきた。その中にはナイロビのキベラ・スラムを改良するための森をモチーフにしたデザイン設計などもあり、最近では日本の研究者とともにスラムに小学校や公衆トイレを設計・建築するプロジェクトを開始している。そうした取り組みについてオランゴ氏は、日本で学んだことを自分の生誕地であるケニアに還元し、両国のつながりを構築することをめざしているという。そして、プロジェクトには日本人学生もかかわっているけれども、地元住民だけでなくケニアの大学の建築学科の学生ももっと巻き込みながら活動をしていきたいという今後の展望を述べた。また、日本をはじめとする海外の援助を受け身に待つのではなく、ケニア自身が自らの問題としてこうした取り組みを主体的に行なっていくことの必要性を最後に強調されてもいた。

今回のセミナーにはAA研の所員や東京外国語大学の学生にくわえて、建築設計にかかわる仕事や研究を専門とする人も参加していた。前述の講演の後に総合討論を行ったが、そのなかではオランゴ氏がデザインの中で重視したというナイロビのスラムの文化とは具体的にどのようなものなのか、またスラムの形成史やそこにおける土地の権利関係などプロジェクトの対象であるスラムについての質問が出された。ほかにも、オランゴ氏が中心となって実際にスラムで建築をしたとき、どのように地元住民に説明をして理解を得たのか、住民とのあいだにトラブルは起きなかったのかといった点が質問されもした。さらに、講演の中でオランゴ氏自身が触れていた点でもあるのだが、都市化や都市開発をめぐって日本とケニアのあいだにはどのような共通点と相違点があるのかが議論にもなった。つまり、日本の第二次大戦後の復興とケニアの独立(1963年)後半世紀の経済成長、そこにおける都市の発展やスラムの形成はどこまで同じでどこから違

うのかが議論された。この結果、日本とケニアの双方の特徴があらためて浮き彫りになるとともに、両者が今後どのように協力していくべきかについて理解を深めることができた。

※当報告の内容は著者の著作物です。 Copyrighted materials of the authors.